『ハックルベリー・フィンの冒険』における黒人表象

鈴木　惠介

序

『ハックルベリー・フィンの冒険（*Adventures of Huckleberry Finn*）』（1885, 以下『ハック・フィン』）における「黒人」[1]の描かれ方には、マーク・トウェイン（Mark Twain, 1835-1910）が生きた時代の南部人としての差別意識が表れている。『ハック・フィン』はトウェインの少年時代から青年時代の場面や人物、出来事をもとにして書かれた小説である（Blair 9）。そのため、作品の舞台であるミズーリ州のセント・ピーターズバーグ（St. Petersburg）という架空の村は、トウェインが少年時代から青年時代を過ごしたミズーリ州ハンニバル、時代設定は南北戦争以前の 1840 年代から 1850 年代頃だと考えられる。したがって、『ハック・フィン』の中では、当時まだ存在していた奴隷制について描かれている。そして、黒人に対するトウェインの意識は、『ハック・フィン』の中で黒人がいかに表象されているかを考えることで知ることができる。

『ハック・フィン』の中では、裕福な白人男性を中心とした社会構造が描かれているが、そのような社会構造は、アメリカが国家として成立した当初から存在していた。アメリカ合衆国の建国の父の 1 人であり、第 3 代大統領でもあるトマス・ジェファソン（Thomas Jefferson, 1743-1846）により起草されたアメリカ独立宣言書の前文には、「すべての人間は平等につくられている（[All] men are created equal[.]）」と謳われている（19）。しかし、こ

こでの全ての人間とは裕福な白人男性だけを指し、「インディアン」や黒人、女性、白人年季奉公人はその中には含まれていなかった（Morris 4)。そのような人種差別や性差別、階級差別は、トウェインが生きた 19 世紀から 20 世紀にかけても色濃く存在していたのである。

本稿で主に取り上げるのは、トウェインの人種についての意識である。アメリカほど人種差別が長い間重要になっている国は世界の歴史に存在しない（Zinn 23)。特に、人種問題はアメリカ南部において重要な問題である。南北戦争による南部の奴隷制の解体の後も、人種差別主義や白人優越主義、特にアングロ・サクソン優越主義の考えは根強く残っていた（Stampp 8)。

トウェインは、南北戦争以前の南部社会での黒人の状況を、『ハック・フィン』の中でリアルに描き出している。『ハック・フィン』の前作である『トム・ソーヤーの冒険（*The Adventure of Tom Sawyer*)』(1876，以下『トム・ソーヤー』)でも、トウェインは、同じようにセント・ピーターズバーグを舞台としているが、この作品では、南部社会は少年時代の郷愁に満ちた描かれ方をしており、黒人の描写は『ハック・フィン』と比べると、ずっと少ないものである。トウェインは、『ハック・フィン』の中で、前作では描かなかった人種問題に焦点を当て、南北戦争以前の南部社会の「真実の」姿を描こうとしたといえるだろう。

『ハック・フィン』については、作者自ら『トム・ソーヤー』の続編と呼んでいるが、この 2 つの作品は 2 つの点で大きく異なっている。1 つには、『ハック・フィン』では、主人公が前作の『トム・ソーヤー』のトム・ソーヤー（Tom Sawyer，以下トム)からハックルベリー・フィン(Huckleberry Finn，以下ハック)に変更されているという点である。中産階級の子どもであり、村の中心的な子どもであるトムと違い、家がなく、アルコールに溺れる行方不明の父親しかいないハックは、トムとは異なった存在である。同じ村に住む「ダグラス未亡人（the Widow Douglas)」に預けられているハックは、ダグラス未亡人とその妹である「ミス・ワトソン(Miss Watson)」による「文明化（sivilize)」（*AHF* 13)[2]から逃げてしまうため、南部社会の一員になれないでいる。このような社会の一員になりきれ

ないでいる子どもを主人公とした点が、『ハック・フィン』と『トム・ソーヤー』との違いである。

もう１つの違いは、『トム・ソーヤー』が三人称で書かれた作品であったのに対し、『ハック・フィン』は一人称で書かれている点である。トウェインは、ハックという社会の外側にいる子どもの視点を用いることによって、南部社会を『トム・ソーヤー』とは異なった角度から描いているのである。

ハックの一人称を使って『ハック・フィン』を執筆した最大の理由は自身も幼少期を過ごした南北戦争以前の南部社会を批判するためだと考えられる。『トム・ソーヤー』において表面的には平和で牧歌的に描いた南部社会を、『ハック・フィン』では、ハックという社会の外側の視点を用いることによって異なった視点から見直し、南部社会の慣習や制度を批判しているのだ。

トウェインが『ハック・フィン』によって特に批判しているのは、南部社会が有していた奴隷制度であり、黒人差別である。それは、白人の少年であるハックと黒人奴隷であるジム（Jim)との交流が描かれている点、また、ハックが、「よし、それならおれは地獄へ行こう（All right, then, I'll go to hell[.])」（*AHF* 223)といって逃亡奴隷として捕まってしまったジムを助け出す決心をすることで、白人社会の価値観に反抗し、ジムの味方をする点からも読み取ることができる。

このように、トウェインは自身が幼少期を過ごした南部社会を批判することによって、南部人としての意識を捨て去っているかのように見える。しかし、『ハック・フィン』における黒人の表象には、トウェインの南部人としての黒人に対する差別意識が表れており、それは、ジムの特徴やジムと白人とのやりとりに表れている。本稿では、『ハック・フィン』における黒人の表象を通してトウェインの人種観を考察し、トウェインの隠れた黒人差別の意識を考える。

Ⅰ．　奴隷制への問題提起

トウェインは、『ハック・フィン』において、ハックの一人称の視点を用いて語ることによって、自らが幼少期を過ごした南部社会が有していた奴隷制の様子を読者に提示し、奴隷制や人種差別に対して問題提起している。作品の中で、ハック自身は奴隷制について基本的には観察するにとどまり、直接的な批判はしないものの、読者に観察したままの残酷さを伝えるのである。

ハックの視点は南部社会を支配している裕福な白人男性の人々のものとは異なったものである。それには彼の南部社会での立場が関係している。ハックには母親がおらず、アルコールに依存している行方不明の父親しか肉親がいない。迷信を信じ、ダグラス未亡人に預けられる以前は読み書きができず、南部社会から孤立し、「砂糖の大樽（sugar-hogshead)」（*AHF* 13）を寝床としていたハックは「プア・ホワイト」の子どもといえる。そのため、ハックは、彼が暮らすセント・ピーターズバーグの人々とは異なった存在なのである。次の引用は、『トム・ソーヤー』でのハックが初めて登場する場面のものだが、ここにはセント・ピーターズバーグでのハックの立場が端的に表れているといえる。

> Shortly Tom came upon the juvenile pariah of the village, Huckleberry Finn, son of the town drunkard. Huckleberry was cordially hated and dreaded by all the mothers of the town, because he was idle, and lawless, and vulgar and bad—and because all their children admired him so, and delighted in his forbidden society, and wished they dared to be like him. Tom was like the rest of the respectable boys, in that he envied Huckleberry his gaudy outcast condition, and was under strict orders not to play with him. (40)

この場面で、ハックは「村の若きのけ者」であり、子どもたちの母親から嫌悪されている子どもであるとされている。また、村の「立派な」子ども

たちはハックの自由な身分に憧れているが、これは、子どもたちにもプア・ホワイトであるハックを「他者」とする共通的な認識があることを意味している。ハックの視点は、南部社会の人々とは異なったものなのである。

しかし、ハックにも社会に参加する機会を与えられる。ダグラス未亡人は、家のないハックを自分の家に住まわせ、妹であるミス・ワトソンと共に、彼を「文明化」しようとする。しかし、ハックはダグラス未亡人とミス・ワトソンによる「文明化」に我慢することができない。ここでいう「文明化」とは、ボロボロの服を着て、自由気ままに生きているハックに、「きちんと」した服を着させ、規則正しい時間通りの生活を送らせ、教育を受けるとともに、キリスト教徒として生きることを意味している。それは、トムと同じように、成人すれば、中産階級の価値観を身につけた「紳士」として南部社会で生きていくことでもある。しかし、そのような生活に耐えることができず、逃げ出してしまうハックは、南部社会の人々の価値観を知ってはいるものの、それを完全には共有していない状態にあるといえる。

トウェインがこのような南部社会の価値観を持っていない子どもの視点を用いて南部社会を描いたのは、『トム・ソーヤー』で描いた南部社会を社会の外側の視点から捉え、「真実の」南部を描きだすためだといえる。『トム・ソーヤー』において、セント・ピーターズバーグの村は次のように表現されている。

> Saturday morning was come, and all the summer world was bright and fresh, and brimming with life. There was a song in every heart; and if the heart was young the music issued at the lips. There was cheer in every face and a spring in every step. The locust trees were in bloom and the fragrance of the blossoms filled the air. Cardiff Hill, beyond the village and above it, was green with vegetation, and it lay just far enough away to seem a Delectable Land, dreamy, reposeful and inviting. (16-17)

『トム・ソーヤー』では、セント・ピーターズバーグは、「鮮やかで、すがすがしく、生命であふれていた」村だとされており、「全ての心に歌があった」と描写されている。花の匂いがあふれるこの村は、平和で牧歌的な様子が伝わる描写となっている。しかし、それは裕福な白人男性にとっての平和な社会であり、それ以外の人々の眼に映る南部社会は、それとは異なったものだったのである。

ハックの視点による語りでは、トウェインは、「物語の語り方（“How to Tell a Story”）」(1895)の中で説明している、「ユーモラスな物語（the humorous story)」の語り方を用いている（Yamaguchi 84)。このエッセイの中で、トウェインは「喜劇的な物語（the comic story)」はイギリスのものであり、「頓知のある物語（the witty story)」をフランスのものとし、「ユーモラスな物語」がアメリカのものだとしている（“How to Tell a Story” 391)。「ユーモラスな物語」の手法とは「不調和なものとばかげたことを、とりとめのない、時には目的もない形でつなぎあわせ、それらがばかげたものであることに無邪気に気付いていないように見せること」だと、トウェインは述べており、それが「アメリカ的な芸の基礎」だとしている（“How to Tell a Story” 394)。トウェインは、この手法を用いることによって、奴隷制が深刻な問題であるということに無邪気にも気付かないハックにその様子を語らせることによって、奴隷制を当たり前のものとしている南部社会を、皮肉を込めて描き出しているのである。

トウェインは『ハック・フィン』を現実的な物語として描いたといえる。そのような意図は作品の冒頭に表れている。『ハック・フィン』は次のようなハックの言葉から始まる。

> You don’t know about me, without you have read a book by the name of “The Adventures of Tom Sawyer,” but that ain’t no matter. That book was made by Mr. Mark Twain, and he told the truth, mainly. There was things which he stretched, but mainly he told the truth. That is nothing. I never seen anybody but lied, one time or another, without it was aunt Polly, or the widow, or maybe

> Mary. Aunt Polly—Tom's aunt Polly, she is—and Mary, and the widow Douglas, is all told about in that book—which is mostly a true book; with some stretchers, as I said before. (*AHF* 13)

ハックは、『トム・ソーヤー』の中でトウェインが「だいたい本当のことを書いている」というとともに、「話をふくらませたところもある」ということを強調している。そして、それを、口語である“ain't”を使用していたり、“were”とすべきところを“was”としてしまうなどの文法的な間違いを含んだハックの話し言葉によって語らせることによって、トウェインはこの作品をよりリアルなものにしているのである。このほかの箇所でも、ハックは“civilize”を“sivilize”(*AHF* 13)と綴るなどの、文法や綴りの間違った言葉で自らの物語を語っており、トウェインの、『ハック・フィン』をプア・ホワイトの子どもが語る現実的な物語にしようとする意図が読み取れる。

ハックによる語りによる効果は、作品に現実味を帯びさせるだけではない。ハックの使う英語は、教育を受けていない「浮浪児」の話す言葉であり、トウェインは、ハックの使う英語によって、この作品が、南部社会に属していないプア・ホワイトが語る物語であることを示している。逆を返せば、ハックがプア・ホワイトであることは、綴りや文法に間違いのある言語によって表されているといえる。

ハックの用いる英語と南部社会を支配している裕福な白人男性の話す英語の違いは明確である。たとえば、セント・ピーターズバーグの「立派な」人物の 1 人であるサッチャー判事 (Judge Thatcher)の話す英語は次のようなものである。

> “There—you see it says 'for a consideration.' That means I have bought it of you and paid you for it. Here's a dollar for you. Now, you sign it.” (*AHF* 29)

サッチャー判事の話す英語は文法的な間違いや綴り間違いもなく、ハックの話す英語とは明らかに異なっているといえる。トウェインは、南部社会

を支配する裕福な白人男性の話す英語とプア・ホワイトの話す英語を異なったものにすることで、階級の違いを示しているのである。

ハックの語りは南部社会の奴隷制を直接批判することはない。しかし、それを無垢な視点から観察し、語ることによって、読者に重要な問題提起をする方法としては効果的である。セント・ピーターズバーグから逃げ出したハックは、まず、奴隷制によって豊かな生活を享受しているグレンジャーフォード家の人々の様子を観察する。ジムと共に乗っていた筏から蒸気船によって投げ出され、ジムとはぐれてしまったハックはグレンジャーフォード家の人々によって保護される。「南部のもてなし（Southern hospitality)」と呼ばれるこのような対応は南部社会の特徴の 1 つである（井出 13)。しかし、ハックに対して優しくふるまう彼らは、それと同時に奴隷を保有している残酷な存在でもある。グレンジャーフォード家について、ハックは次のように語る。

> The old gentleman owned a lot of farms, and over a hundred niggers. Sometimes a stack of people would come there, horseback, from ten or fifteen mile around, and stay five or six days, and have such junketings round about and on the river, and dances and picnics in the woods, daytimes, and balls at the house, nights. These people was mostly kin-folks of the family. The men brought their guns with them. It was a handsome lot of quality, I tell you. (*AHF* 126)

グレンジャーフォード家の家長であるグレンジャーフォード大佐（Col. Grangerford)は「年取った紳士」であり、農場をたくさん持ち、100 人以上の黒人奴隷を所有しているとハックは述べる。また、彼らは親類とダンスやピクニック、舞踏会を催すという優雅な生活を送っているとハックは述べている。グレンジャーフォード家のような、奴隷を 100 人以上も所有している家族は、当時の南部ではそれほど多くはなかった。実際、奴隷を 100 人所有している家族は、南北戦争以前の南部社会では、3000 世帯に満たず、南部の人口からすると少ないものであった（Stampp 30-31)。彼らは黒人奴

隷に労働をさせることによって、アメリカにおける階級制度を確立し、自分たちがその頂点に君臨することによって、経済的に豊かな生活を送っていたのである。

そのような階級意識は、呼び名にも表れている。グレンジャーフォード家の家長は、グレンジャーフォード大佐というように大佐（Colonel)の称号を自らに冠している。グレンジャーフォード大佐のような南部の紳士は、自らにそのような称号を冠することで、貴族がいないアメリカには本来は存在しないはずの、架空の階級制度をつくりだしたのである。

ハックはグレンジャーフォード家によるこのような黒人奴隷に対する経済的搾取を直接的に批判することはない。しかし、紳士と呼ばれ、表面的には豊かな生活を送っている彼らが奴隷制という暴力的な制度を容認していることを、ハックはありのままに語る。それによって、トウェインは読者に奴隷制の残酷さを伝え、問題提起を行っているといえるだろう。

ハックの視点から観察される、奴隷制を当然のものとしている南部社会の偽善性に対する皮肉が最も効果的に現れているのは、物語の終盤である、トムの親戚のフェルプス家の場面である。フェルプス家の人々もまた、奴隷を有している家族である。彼らの黒人に対する態度は、ハックをトムだと勘違いし、歓迎したサリーおばさん(Aunt Sally)の言葉から推測できる。ハックがサリーおばさんに対し、到着が遅れたのは蒸気船のシリンダーの頭が破裂したためだという思いつきの嘘をつくと、サリーおばさんはけが人がいたかどうかを尋ねる。ハックは、「黒んぼが 1 人死にました（Killed a nigger.)」（*AHF* 230)と答えるが、それに対し、「そう、それは運が良かった（Well, it's lucky.)」（*AHF* 230)という。この会話からは、サリーおばさんが、黒人が死ぬことを気に留めない様子がわかる。

さらに、フェルプス家での監禁されているジムを救出する場面で、ハックはトムの黒人に対する態度を観察する。この時、主人であるミス・ワトソンの遺言によって、すでにジムは自由の身であるのだが、トムは、ハックがジムの救出を行おうとしているのを知ると、それを自分好みの「脱出劇」に仕立て上げようとする。それ自体が、トムがジムの救出を遊びにし

てしまっているという点で差別的だといえる。そのうえ、トムは、ジムに対し、ジムが食べるトウモロコシパンにろうそく立てのかけらを入れるといういたずらをする。それを食べたジムは全ての歯が折れそうになるが、トムはそれを面白がるだけであり、同情の気持ちを全く表わさない。トムによるジムに対するこのような悪質ないたずらを、ハックは批判することはない。しかし、黒人が、白人の子どもにさえ、このようないたずらをされることを観察し、奴隷制の残酷さを読者に伝えている。

また、ジムの救出の場面では、トムに対するハックの気持ちを通し、奴隷制に対する皮肉が描かれている。ハックは、奴隷であるジムを助けることを罪だと思っており、トムにジムの救出について話した時も、トムが手伝ってくれるとは思っていない。しかし、ハックの考えとは裏腹に、トムはジムの救出を協力するといい、ハックはこれに対し、次のような疑問を抱く。

> Well, one thing was dead sure; and that was, that Tom Sawyer was in earnest, and was actuly going to help steal that nigger out of slavery. That was the thing that was too many for me. Here was a boy that was respectable, and well brung up; and had a character to lose; and folks at home that had characters; and he was bright and not leather-headed; and knowing, and not ignorant; and not mean, but kind; and yet here he was, without any more pride, or rightness, or feeling, than to stoop to this business, and make himself a shame, and his family a shame, before everybody. I *couldn't* understand it, no way at all. It was outrageous, and I knowed I ought to just up and tell him so; and so be his true friend, and let him quit the thing right where he was, and save himself. (*AHF* 242)

トムは「立派で、良い生まれの少年」であり、「賢くて、まぬけではない」だけでなく、「卑劣ではなく、親切」であるにも関わらず、ジムを助けようとしている自分を手伝ってくれることが、ハックには理解できない。ハックは、トムが自分の「非道な」行為に加担してしまうことを心配している。

ハックが今日の視点から見れば正しいことである奴隷の救出を「非道な」行為だと思っていること、そして、トムのような「立派な」少年はそのようなことはしないのだと思っていることは、トウェインによる奴隷制に対しての痛烈な皮肉である。

ハックは、自分がかかわることになる南部社会における奴隷制を決して批判することはない。しかし、「年老いた紳士」や、「立派な」少年が、奴隷制を当然のものとして受け入れていることを描写し、その表面的な善良さと、奴隷制を当然のものとしている残酷さをハックの視点から観察することによって、トウェインは読者に奴隷制についての問題提起を行っているのである。

Ⅱ．語り手の成長と奴隷制批判

トウェインが、ハックの視点を用いることで、奴隷制を当然のものとして享受している南北戦争以前の南部社会の人々を観察し、その残酷さを読者に伝えているのに対して、ハックの内面的な変化は奴隷制や人種差別に対するより直接的な批判となっている。トウェインは、ハックという南部社会に属さない子どもが、ミシシッピ川を漂う筏という自然の中で、黒人であるジムに対する態度を次第に改めていく様子を描くことで、奴隷制や黒人差別を社会的な「悪」として批判している。

ハックは南部社会の一員になれないでいる子どもであるが、南部社会の人々と同じように、黒人に対して差別的な意識を持っており、奴隷制に対しても疑問をもってはいない。南部社会の価値観を共有していないハックでさえも黒人に対する人種差別的な考えは持っていたのである。それは、ジムとともに旅に出る以前のハックとトムの会話の様子からわかる。トムは、「楽しむために（for fan)」（*AHF* 19）奴隷であるジムを木に縛り付けたいというが、それに対してハックは反対するはするものの、それはトムがそのようないたずらをすれば自分が家にいないことがばれてしまうからというものであり、決してトムのいたずらを非難しているからではない。こ

の時点で、ハックの黒人に対する感情は、トムのそれと、あまり変わらないのである。

しかし、奴隷制や黒人差別といった問題に、ハックは直面せざるをえない状況となる。自分が殺されたように見せかけ、セント・ピーターズバーグや父親との暮らしから逃げ出したハックは、自分についての情報を聞き出そうと女装をして民家を訪ねるのだが、そこで、村の人々がハック殺しの犯人を逃亡奴隷のジムだと決めつけ、今にもジムに捜索の手が回りそうだということを知る。ハックはこの場面で、「やつらがおれたちを追っている! (They're after us!)」(*AHF* 72) といって、ジムとともに筏に乗ってミシシッピ川に逃亡する。この場面では、実際は追われているのはジムだけなのだが、「おれたち (us)」という言葉を使っているという点にハックの本能的な人間性が表れている (Marx 9))。しかし、この出来事をきっかけに、ハックはジムの自由を望む気持ちとそれを戒める南部社会の価値観との葛藤を生み出してしまうのである。

そのようにして、ハックはジムと共に逃亡することとなるが、黒人に対する差別意識は変わらずに持っていた。ハックとジムは難破船に殺人犯とともに閉じ込められてしまう場面では、そこから脱出した後、その出来事に興奮するハックに対し、ジムは冷静に考え、同じような目には遭いたくないという。そのようなジムに対し、ハックは、「なるほど、ジムが正しい。ジムはほとんどいつも正しいんだ。ジムは黒んぼにしては並はずれた頭の持ち主だ (Well, he was right; he was most always right; he had an uncommon level head, for a nigger.)」(*AHF* 86)という。これは、ハックが黒人は白人よりも劣っているという考えを持っていたことを意味している。また、ジムと共にソロモンについての議論をする場面では、「おれは何をいっても無駄だとわかった—黒んぼに議論の仕方は教えられない。それで、おれは話すのをやめた (I see it warn't no use wasting words—you can't learn a nigger to argue. So I quit.)」(*AHF* 90)とハックはいう。この場面にも、ハックがジムを黒人であるという理由で能力が劣るととらえていることが表れている。

そのような差別的な意識は、ジムが自由の身になった後のことをハック

に語る場面にも強く表れている。ジムは、自由州へ無事着くことができ、奴隷の身分から解放されたら、奴隷である妻と子どもたちを奴隷の身分から助け出したいが、それが出来なかった場合、奴隷反対派の人間に頼んで盗み出してもらうという。それを聞いて、ハックは次のような気持ちになる。

> It most froze me to hear such talk. He wouldn't ever dared to talk such talk in his life before. Just see what a difference it made in him the minute he judged he was about free. It was according to the old saying, "give a nigger an inch and he'll take in ell." Thinks I, this is what comes of my not thinking. Here was this nigger which I had as good as helped to run away, coming right out flat-footed and saying he would steal his children—children that belonged to a man I didn't even know; a man that hadn't ever done me no harm. (*AHF* 110-11)

ハックは、ジムがそのような考えを持っていたことを知り、非常に驚く。そして、「黒んぼを甘やかせば、すぐつけあがる」という言い伝えを引き合いに出し、ジムに対する差別的な感情をあらわにするのである。

しかし、社会から離れた筏での生活は、ジムに対するハックの差別的な意識を次第に薄くしていったといえるだろう。そのきっかけとなったのは、とつぜん現れた霧によって離ればなれになってしまったハックとジムが、やっとの思いで再会できたのにも関わらず、ハックが、それは全て夢で実際には何も起こらなかったといってジムを騙し、怒らせてしまった出来事である。ハックがついた嘘によって、ジムが怒りながらもひどく悲しむ様子を見て、ハックは以下のように語る。

> It was fifteen minutes before I could work myself up to go and humble myself to a nigger—but I done it, and I warn't ever sorry for it afterwards, neither. I didn't do him no more mean tricks, and I wouldn't done that one if I'd a knowed it would make him feel that way. (*AHF* 95)

ハックは、ジムのところへ謝りに行くのに 15 分かかったとはいっているものの、結果的には謝り、「おれはそれ以上ジムを騙そうとはしなかったし、ジムをあんなふうに感じさせるんだって知ってたら嘘なんかつかなかった」と語る。自分のことを真摯に心配していたジムを傷つけてしまったことを知り、ハックはジムの中に人間性を発見するとともに、自分のジムに対する態度を反省する。社会から離れた自然の中で、ジムとともに生活を送ることによって、ハックはジムの中の人間性に気付くのである。

その後のハックの態度からも、ジムに対する差別的な意識は、徐々にだが、薄くなっているといえるだろう。ハックとジムが乗る筏に、2 人の詐欺師が乗り込んでくる場面で、ハックはすぐに彼らが詐欺師だということを見抜くが、ハックは「ジムにいっても仕方がないから、いわなかった（[It] warn't no use to tell Jim, so I didn't tell him.)」（*AHF* 142)といって、その事実をジムには黙っている。しかし、その後、ジムを筏に残して、詐欺師たちと行動しなければならなくなったハックは、ジムに再会した時、「おれたちは長い間おしゃべりをして、おれはジムに全部のことを話した（[We] had a long gabble, and I told Jim everything.)」（*AHF* 218)と語っている。これらの場面からも、ハックがジムに対し信用を抱くようになり、差別的な態度が次第に和らぐ様子が読み取れる。

ハックのジムに対する差別感情が次第に無くなっていく様子が表れているのは、ジムが家族のことを心配し、悲しむ場面である。この場面で、ハックはジムの様子を次のように語る。

> I went to sleep, and Jim didn't call me when it was my turn. He often done that. When I waked up, just at daybreak, he was setting there with his head down betwixt his knees, moaning and mourning to himself. I didn't take notice, nor let on. I knowed what it was about. He was thinking about his wife and his children, away up yonder, and he was low and homesick; because he hadn't ever been away from home before in his life; and I do believe he cared just as much for his people as white folks does for theirn. It don't seem natural, but I reckon it's so.

> He was often moaning and mourning, that way, nights, when he judged I was asleep, and saying "Po' little 'Lizabeth! po' little Johnny! it mighty hard; I spec' I ain't ever gwyne to see you no mo', no mo'!" He was a mighty good nigger, Jim was. (*AHF* 170)

ハックは、妻や子どものことを考えて、うめき、嘆いているジムの様子をみて、「彼は白人と同じように彼の家族を心配している」とハックは語る。それを「普通じゃない」と思いつつも、黒人であるジムを白人と変わらないと考えているこの描写からは、ハックの差別意識が薄れた様子が読み取れる。さらに、トムとともに行ったジムの「脱出劇」で、負傷したトムを気遣うジムの姿を見たハックは、「おれはジムの中身が白人だって知ってた(I knowed he was white inside[.])」(*AHF* 279)とまでいっている。奴隷であり、白人所有者の財産として扱われるジムが、自分と同じような、感情を持つ1人の人間であることに、ハックは次第に意識していったといえるだろう。

しかし、ハックの中のジムの自由を望む気持ちは、個人の問題にとどまらず、南部社会の価値観との問題となる。『マーク・トウェイン自伝(*The Autobiography of Mark Twain*)』(1917)によると、当時の南部社会では、奴隷制は、「正当で、道徳的に正しく、神聖(right, righteous, sacred)」(30)とされており、それは、プア・ホワイトであるハックにとっても同じ認識だった。実際、旧南部社会では、奴隷を盗む行為には、どの州でも厳しい罰が規定されていた(Stampp 198)。社会の規律を破り、逃亡奴隷を助けようとしているハックに、罪の意識は次のように表れる。

> It would get all around that Huck Finn helped a nigger to get his freedom; and if I was to ever see anybody from that town again, I'd be ready to get down and lick his boots for shame. That's just the way: a person does a low-down thing, and then he don't want to take no consequences of it. Thinks as long as he can hide it, it ain't no disgrace. That was my fix exactly. The more I studied about this, the more my conscience went to grinding me, and the more wicked, and

low-down and ornery I got to feeling. (*AHF* 222)

ジムの自由を望むハックとそれを禁じる南部社会の価値観との葛藤が描かれているが、ここで南部社会の価値観は「良心」として表れ、ハックを強く戒める。ハックは、もし自分が逃亡奴隷を助けたことを知られてしまったら、「気がめいって、恥ずかしくて靴をなめる思いになる」といい、さらに、「これについて考えるほど、良心がおれを苦しめて、悪い、卑しい、卑劣な気分にさせた」と語っているように、強い良心の呵責を感じている。

このようなハックと「良心」の葛藤は奴隷制に対する皮肉であるといえるだろう。奴隷制が解体された今日の視点から見れば、ハックが行おうとしているジムの解放こそは正しいことであり、それは、『ハック・フィン』は奴隷制が解体された 1865 年から 20 年後に出版された作品であるため、多くの読者が共通して感じることである。ハックによるジムの解放を阻もうとしている南部社会の価値観こそが「良心」によって責められなければならないものなのである。ハックが正しいことを読者は知っているが、ハックはそれに気付かないのだ (Hoffman 32)。その結果、奴隷の逃亡を助けているハックが「良心」によって責められるという皮肉が生まれている。

奴隷を助けようとするハックとそれを戒める南部社会の価値観との葛藤の場面にも、トウェインが「物語の語り方」で示した手法が効果的に使われている。「物語の語り方」のユーモラスな物語の手法を、「ばかげたこと」ではなく、「深刻なこと」に置き換えることで、奴隷制が深刻な問題だとは気付かないハックに、ジムを助けたいと思う自分の意思と南部社会の価値観との葛藤を語らせ、奴隷制を批判しているのである。

さらに、トウェインは、ハックに「良心」となって表れる当時の南部社会の価値観を否定させることによって、ハックの精神的な成長を描くとともに、奴隷制を有していた南北戦争以前の南部社会への批判を行っている。ジムの自由を願う気持ちを「良心」によって阻まれたハックは、ジムとともに川を下った旅について考え始める。

> And went on thinking. And got to thinking over our trip down the river; and I see Jim before me, all the time, in the day, and in the night-time, sometimes moonlight, sometimes storms, and we a floating along, talking, and singing, and laughing. But somehow I couldn't seem to strike no places to harden me against him, but only the other kind. I'd see him standing my watch on top of his'n, stead of calling me—so I could go on sleeping; and see him how glad he was when I come back out of the fog; and when I come to him again in the swamp, up there where the fraud was; and such-like times and would always call me honey, and pet me, and do everything he could think of for me, and how good he always was; and at last I struck the time I saved him be telling the men we had small-pox aboard, and he was so grateful, and said I was the best friend old Jim ever had in the world, and the *only* one he's got now; and then I happened to look around, and see that paper. (*AHF* 222-23)

ハックは、どんな時もジムと一緒にいたことを思い出し、また、ジムが自分にとても親切にしてくれたこと、自分のことを「世界で一番の友だち」や「今ではたった１人の友だち」といってくれたことを思い出す。そして、「よし、それならおれは地獄へ行こう」（*AHF* 223)といって、ジムをフェルプス家から盗み出すことを決定する。ハックは筏の上での共同生活を通して、ジムに対する感情を変え、南部社会の慣習に反抗し、自分の意思に従い、ジムの救出を行おうとする。このようなハックの精神的な成長には、トウェインの奴隷制に対する批判が強く表れているといえよう。

トウェインは、ミシシッピ川の上を漂う筏という自然の中での生活を通して、ジムに対するハックの意識の変化を描くことによって、奴隷制や黒人差別を社会的な「悪」として批判している。奴隷制に対する批判には、南部社会から離れたミシシッピ川を漂う筏でハックとジムがともに生活をするという設定が、奴隷制や黒人差別を社会的なものとして批判するために、重要な役割を果たしている。また、ハックが「良心」として表れる南部社会の価値観を否定し、自分の意思に従ってジムの救出を行おうとする

描写には、ハックの精神的な成長とともに、奴隷制を有する旧南部社会への直接的な批判を読み取ることができる。

Ⅲ．ミンストレル・ショウと白人優越主義

『ハック・フィン』における黒人の描かれ方は、比較的好意的なものではあるが､そこにはトウェインの差別意識も表れている｡『ハック･フィン』は奴隷制や黒人に対する人種差別に対し反対の立場をとった物語であるといえるが、作品の中での黒人の描かれ方には、トウェインの隠れた差別意識が表れているのである。

『ハック・フィン』の中で、トウェインは、黒人たちを現実的に描き出そうとしているといえる。トウェインは､『ハック・フィン』の主な登場人物の１人であり、黒人であるジムの人物像について、叔父の家にいたアンクル・ダヌル（Uncle Dan’l)をモデルにしたことを『マーク・トウェイン自伝』の中で明らかにしている（6)。

『ハック・フィン』では、「黒んぼ（nigger)」という語が多く使われているが、これからトウェインの差別意識を考えるのは難しいだろう。トウェインは、「黒んぼ（nigger)」という語を、「奴隷（slave)」と同義に使用しており、それは南北戦争以前の南部社会では一般的な使用法であった（Smith 105)｡「黒んぼ（nigger)」という語はトウェインのリアリズムによるものだと考えられる（Cox 88)｡

しかし、この「黒んぼ（nigger)」という語の使用について問題がないわけではない。この語が学校の教室で使用されることに問題があるとして、ニューヨーク市教育委員会は 1957 年に『ハック・フィン』を小学校と中学校の認定教科書リストから除外している（Henry 26)。このような問題を引き起こす「黒んぼ（nigger)」という言葉が『ハック・フィン』の舞台となっている時代の南部社会では当然のように使われていたということが、当時の南部社会の黒人に対する差別の大きさを表している。

トウェインが『ハック・フィン』に登場する黒人たちを好意的に描き出

そうとしているのは間違いないだろう。『マーク・トウェイン自伝』の中では、黒人は「私たちの友人（friends of ours)」(5)であり「仲間（comrades)」(5)であったと語られており、ジムのモデルとしたアンクル・ダヌルに関しては、「誠実で、優しい親友であり、味方、助言者（a faithful and affectionate good friend, ally and adviser)」(6)であったと、トウェインの黒人に対する好意的な心情が述べられている。しかし、『マーク・トウェイン自伝』のこのような描写からは、トウェインが黒人に対して持っていた好意的な印象と奴隷制が当然のように受け止められて、感覚が麻痺している様子が読み取れる。

実際に、ジムを取り巻く状況は、当時の南部社会の現実と同じように描き出されているといえる。森の中での暴力的な父親との生活から逃げ出したハックは、ジャクソン島という無人の小島で、ジムと偶然再会し、ジムがジャクソン島に来た理由を尋ねる。すると、ジムは次のように答える。

> “Well, you see, it ’uz dis way. Ole Missus—dat’s Miss Watson—she pecks on me all de time, en treats me pooty rough, but she awluz said she wouldn’t sell me down to Orleans. But I noticed dey wuz a nigger trader roun’ de place considable, lately, en I begin to git oneasy. Well, one night I creeps to de do’, pooty late, en de do’ warn’t quite shet, en I hear ole missus tell de widder she gwyne to sell me down to Orleans, but she didn’t want to, but she could git eight hund’d dollars for me, en it ’uz sich a big stack o’ money she couldn’ resis’. De wider she try to git her to say she wouldn’t do it, but I never waited to hear de res’. I lit out mighty quick, I tell you.” (*AHF* 55)

ジムは、ジャクソン島に来た理由をハックに正直に話す。ジムの話によると、ジムの主人であるミス・ワトソンが彼を深南部であるニュー・オリンズに売り払ってしまうのではないかという不安から、主人のもとから逃亡する決心をしたそうである。このような奴隷の逃亡は、実際に南北戦争以前の南部社会では頻繁に起こったものであり、その数は毎年数千人にのぼ

った（Stampp 110）。特に、若い男性の奴隷の逃亡が多く、逃亡は、単独か2、3 人の少人数で行われることが多かった（Stampp 110-11）。また、彼らに逃亡を決心させることになった原因は、家族や友人から引き離されたため、彼らの意思に反して他へ売られたため、罰から逃れたり、罰の仕返しをするためといったものが多かった（Stampp 112-13）。したがって、ジムを取り巻く状況や逃亡に至った経緯は、現実に即して描かれているといえるだろう。

また、ジムの言葉からは、トウェインが言語の違いによって、人種の違いを表そうとしていることがわかる。“this”を“dis”としたり、“get”を“git”とするなど、ジムの話す英語はハックのものよりも訛りの強いものである。奴隷として扱われ、南部社会のマイノリティであった黒人の訛りの強い英語からは、トウェインが、彼らの学校教育を受けておらず、南部社会を支配する上流階級や中産階級の白人男性とは異なった英語を話していたことをそのままに表現しようとしたといえる。

このように、トウェインは当時の黒人を取り巻く状況を、当時の状況をありのままに描き、彼らを好意的に描いているといえるが、『ハック・フィン』に描かれる黒人には、彼の差別意識も表れている。『ハック・フィン』の主な登場人物の 1 人であり、黒人であるジムは、迷信的な人物として描かれている。トウェインの描くジムの人物像は、一定の白人たちが昔から今に至るまで持ち続けているステレオタイプの姿を示しているのである。ハックは自分の父親の居場所を知りたいと思い、ジムのもとを訪れるが、ジムは次のように描写されている。

> Miss Watson's nigger, Jim, had a hair-ball as big as your fist, which had been took out of the fourth stomach of an ox, and he used to do magic with it. He said there was a spirit inside of it, and it knowed everything. (*AHF* 29)

ジムは「握りこぶしくらいの大きさの毛玉」を持っており、それを使って「魔術」を行っていたとハックは語る。ジムによると、その中には「魂」

が入っており、その魂は、「すべてを知っている」そうである。このように、ジムは「魔術」を信じている、迷信的な人物として描かれているのである。

そのほかにも、ジムは「前ぶれ」を信じている人物としても描かれている。ジムは、ハックに対し、「悪運（bad luck)」（*AHF* 56)を引き寄せるさまざまな「前ぶれ（signs)」（*AHF* 56)を説明する。それは、「夕飯に使う材料を数えてはならない」や「日没後にテーブルクロスをふるってはならない」といった迷信的なものである。ハックが、「ジムはあらゆる種類の前ぶれを知っていた（Jim knowed all kinds of signs.)」（*AHF* 56)といっているように、ジムは迷信的な「前ぶれ」を信じる人物として描かれているのである。

また、ジムは迷信的な人物であると同時に、嘘つきで怠惰な人物として、描かれている。トムは、ジムが寝ている間に、彼の帽子を脱がせて木の枝にかけるといういたずらをするが、そのいたずらに対するジムの反応は次のようなものである。

> Afterwards Jim said the witches bewitched him and put him in a trance, and rode him all over the State, and then set him under the trees again and hung his hat on a limb to show who done it. And next time Jim told it he said they rode him down to New Orleans; and after that, every time he told it he spread it more and more, till by and by he said they rode him all over the world, and tired him most to death, and his back was all over saddle-boils. Jim was monstrous proud about it, and he got so he wouldn't hardly notice the other niggers. Niggers would come miles to hear Jim tell about it, and he was more looked up to than any nigger in that country. Strange niggers would stand with their mouths open and look him all over, same as if he was a wonder. Niggers is always talking about witches in the dark by the kitchen fire; but whenever one was talking and letting on to know all about such things, Jim would happen in and say, "Hm! What you know 'bout witches?" and that nigger was corked up and had to take a back seat. … Jim was most ruined, for a servant, because he got so stuck up on account of having seen the devil and been rode by witches." (*AHF* 19)

ジムは、眠りから覚めたら帽子が木の枝にかかっていたことについて、「魔女が魔法をかけ、催眠状態にし、州のいたるところに乗せて」行ったと語る。そして、魔女に連れて行かれた範囲をニュー・オリンズ、世界中と広げていき、その嘘を大げさにしていく。ジムはそのような嘘の体験を「誇りに」思い、ほかの奴隷たちから尊敬されるようになると、奴隷としての仕事をしなくなったとハックは語っている。このように、ジムは、迷信的な嘘をつく「ほら吹き」として描かれ、また、それによって尊敬されるようになったことを利用して、奴隷としての仕事をしなくなる怠惰な人物として描かれている。

さらに、この場面では、ジム以外の黒人についても差別的に描かれている。ジムの嘘を彼の周りの奴隷たちは信じ、「黒んぼたちは数マイル先からジムの話を聞きに」来たとハックは語っている。また、ジムの話を聞きに来た黒人たちは、「口をあけて立ち、まるで奇跡のようにやつの全身を眺めた」とも語っている。ジムの荒唐無稽な嘘をほかの黒人たちも信じ、ジムを尊敬するようになるという点から、ジム以外の黒人も、迷信的な人物として描かれているといえる。

トウェインの差別意識は、ジムの滑稽な振る舞いにも表れているといえるだろう。ジャクソン島でジムと偶然出会ったハックは、しばらくの間、そこで生活をともにするが、ジムに対していたずらを思いつく。ハックは、ジムを驚かせるために、蛇の死体をジムの寝床におくが、そこにその蛇の仲間がやってきて、ジムはかまれてしまう。その時のジムの様子は次のように語られる。

> Jim sucked and sucked at the jug, and now and then he got out of his head and pitched around and yelled; but every time he come to himself he went to sucking at the jug again. His foot swelled up pretty big, and so did his leg; but by and by the drunk begun to come, and so I judged he was all right; but I'd druther been bit with a snake than pap's whisky. (*AHF* 64)

ジムは、蛇にかまれると飛び上がり、ウイスキーを飲みだす。すると、ウイスキーのせいで「暴れたり、叫んだり」する。妻子がいるため、明らかにハックよりも年上のはずであるジムが、このように白人の少年によりいたずらをされ、滑稽に慌てふためく姿には、トウェインの、滑稽な黒人を描くことで読者のユーモアを引き出そうする、差別意識が表れているといえるだろう。

ジムの臆病な性格にも、トウェインの黒人に対する差別意識が表れているといえる。ハックとジムは、ミシシッピ川を下っている途中、トウェインの嫌悪するウォルター・スコットの名が冠せられた「ウォルター・スコット号（the *Walter Scott*）」（*AHF* 83）という難破船を発見するが、それを見て、船内を探検しようとするハックに対し、ジムは次のようにいう。

> “I doan want to go fool’n ’long er no wrack. We’s doin’ blame’ well, en we better let blame’ well alone, as de good book says. Like as not dey’s a watchman on dat wrack.”（*AHF* 77）

難破船を恐れることなく探検しようとするハックに対し、ジムは見張りがいるかもしれないといって、反対する。この場面では、勇敢なハックと臆病なジムが対照的に描かれている。白人の少年よりも臆病な人物として、黒人の大人であるジムは描かれているのである。

それに加え、ジムは子どもっぽく、無知な人物として描かれている。ジムは死んだはずのハックにジャクソン島で再会した時、ハックを幽霊だと思い込んで驚くが、これは、フェリプス家に向かう途中でハックに再会したトムの反応とほとんど変わらないものである。ハックを見るなり、ジムは、「ジムは飛びあがって、狂気じみた目でおれを見た（He bounced up and stared at me wild.）」（*AHF* 53）や「ジムはひざまずいて、両手を合わせた（[He] drops down on his knees, and puts his hands together[.]）」（*AHF* 53）と描写されており、むしろ白人の少年であるトムよりも子どものような人物として描かれている。

ジムの子どもっぽさや無知は、ハックとの会話の場面で、より強く表れている。ハックとジムは筏の上で空を見上げながら、星がつくられたものなのか、それとも、自然にできたものなのかという問題について議論を始めるが、その様子は次のように語られる。

> It's lovely to live on a raft. We had the sky, up there, all speckled with stars, and we used to lay on our backs and look up at them, and discuss about whether they was made, or only just happened—Jim he allowed they was made, but I allowed they happened; I judged it would have took too long to *make* so many. Jim said the moon could a *laid* them; well, that looked kind of reasonable, so I didn't say nothing against it, because I've seen a frog lay most as many, so of course it could be done. We used to watch the stars that fell, too, and see them streak down. Jim allowed they'd got spoiled and was hove out of the nest. (*AHF* 136)

この議論の中で、ジムは、星はつくられたものだと主張するのに対し、ハックは自然にできたものだと主張する。さらに、ジムは「月がそいつらを生んだ」という。ジムは無知な人物として描かれているといってよいだろう。また、この場面ではハックもジムの間違った考えを受け入れているという点で、黒人であるジムが白人の少年であるハックよりも無知に描かれているとはいえないが、子どもであるハックとこのような議論をしているという点で、ジムは子どもっぽく、ものを知らない人物として描かれているといえる。

しかし、ジムとハックとの会話には、大人の黒人男性であるジムが白人の子どもであるハックよりも知性的に劣っていることが示されているものもある。ハックとジムがフランス人の話す言葉について話をしている場面では、フランス人が話す言葉は英語ではなくフランス語であると教えるハックに対し、ジムは、フランス人が自分たちと違う言語を話すということが理解できない。それどころか、ジムは、猫や牛は違う言葉を話すが、人間は全て同じ言葉を話すはずだと信じ込んでいる。ハックとジムはともに

無知な人物として描かれているが、ハックの人物像が多面的であるのに比べると、ジムは全く無知な人物として描かれているのである（Woodard and MacCann 145）。

このような黒人に対する差別的な意識は、ジム以外の黒人の描かれ方にも表れている。物語の終盤であるジムの救出劇では、ジムが監禁されている小屋の見張りをしている黒人がいるが、彼もまた、ジムと同じような描かれ方がされている。

> This nigger had a good-natured chuckleheaded face, and his wool was all tied up in little bunches with thread. That was to keep witches off. He said the witches was pestering him awful, these nights, and making him see all kinds of strange things, and hear all kinds of strange words and noises, and he didn't believe he was ever witched so long, before, in his life. He got so worked up, and got to running on so, about his troubles, he forgot all about what he'd been agoing to do. (*AHF* 244)

ジムの見張りをしている黒人もまた、魔女の存在を信じており、自分の頭髪を糸で小さく結わえることで、魔女を追い払えると考えている。ジム以外の黒人もジムと同じように迷信的な人物として描かれているのである。さらに、魔女について「興奮して、話し続け、彼は自分がやろうとしていたことをすべて忘れてしまった」という描写からは、トウェインが、子どもっぽく、滑稽な人物として、黒人を描こうとしているのがわかる。

トウェインが『ハック・フィン』で描く黒人は、白人に都合のよい黒人像だともいえる。ジムは、ミス・ワトソンが自分をニュー・オリンズに売ってしまうことを恐れて逃げ出すが、自分が奴隷の境遇であることに対しては、とくに不満を持つことはない。それは、投機に失敗したことで金を失ってしまったジムの次の言葉から考えられる。

> “Yes—en I’s rich now, come to look at it. I owns myself, en I’s wuth eight hund’d dollars. I wisht I had de money, I wouldn’ want no mo’.” (*AHF* 58)

ジムは、投機によって金を失ってしまったが、自分自身に 800 ドルの値打ちがあることで、自分は金持ちなのだと主張する。人間に金銭的な価値をつけ、売買するという奴隷制の残酷さをジムは容認しており、自分が非人間的に扱われていることに対し、疑問を持たない。このようなジムの姿は白人にとって都合のよい姿だといえる。

このような白人にとって都合のよい黒人像は、ジムとハックの関係からも読み取ることができる。ジムは常にハックに対し、時に小さな抵抗をすることはあるものの、ほとんど逆らうことはない。ハックがジムの救出を決心する時に考えるのは、「おれ（ハック）をハニーと呼んでかわいがり、おれのために考えられることは全部やってくれて、あいつはいつもすごく親切だった([He] would always call me honey, and pet me, and do everything he could think of for me, and how good he always was[.])」（*AHF* 223)という、ジムの従順な姿である。ジムの救出に向かったハックとトムに再会した時も、ジムの様子を、「ジムはおれたちを見て泣きそうなくらい喜んだ。おれたちをハニーとか考えられるすべての愛称で呼んだ（He was so glad to see us he most cried; and called us honey, and all the pet names he could think of[.])」(*AHF* 255)とハックは語っており、ジムは作品を通して白人に対し従順な人物として描かれている。そのような白人に対し従順であるジムの姿にもトウェインの黒人に対する差別意識が表れているといえるだろう。ジムは「迫害者が自分を苦しめ、屈辱を与えるのを許し、それに対し無限の愛で応える人物」として描かれているのである（Morrison 57)。

さらに、ジムが自分よりも白人であるハックやトムの方が優れているということを疑わない点についても、白人に都合のよい黒人像であるといえる。トムは、ジムの救出を自分が好む本に書かれているような脱出劇に仕立てあげようとして、ジムに血でシャツに日記をつけさせるなどの実際には必要のない、劇の「演出」を指示する。それに対するジムの様子を、ハ

ックは、「ジムはそのほとんどを意味がないと思ったけどおれたちが白人で自分よりよくわかっているって考えた（Jim he couldn't see no sense in the most of it, but he allowed we was white folks and knowed better than him[.])」(*AHF* 256)と述べ、さらに、「それであいつは満足して全部トムのいう通りにやるっていった（[So] he was satisfied and said he would do it all just as Tom said.)」(*AHF* 256)と語っており、ジムは自分が白人の子どもよりも劣っていると考え、それを疑っていないように描写されている。ジムは、奴隷であるからではなく、黒人であるからという理由で、自分が白人よりも劣っていることを認めているのである（Morrison 56-57）

このように、『ハック・フィン』において、トウェインは、黒人を写実的に描こうとし、また、好意的ではありながらも、その描き方には差別的なものが多く含まれているといえる。トウェインは、子どもっぽく、無知で、臆病で、滑稽で、従順な人物として、黒人を描いているのである。

以上のような『ハック・フィン』における黒人の描かれ方は、一定の白人が持っていたステレオタイプの黒人像であるといえる。黒人奴隷制が存在していた時代には、黒人男性の奴隷は、生まれつき怠惰で、知的に劣っており、生得的に従順であるというステレオタイプが存在していた(Roberts 135)。『ハック・フィン』における黒人の描かれ方からは、トウェインも隠れた差別意識を持っていたといえる。

『ハック・フィン』に表れているようなトウェインの隠れた黒人差別意識は、彼が奴隷制を扱ったもう 1 つの作品である『まぬけのウィルソン(*Pudd'nhead Wilson*)』(1894)にも表れている。『まぬけのウィルソン』では、裕福な白人の子どもと黒人の血が 32 分の 1 流れている、見た目は白人と変わらない奴隷の子どもの取り換えが行われる。この作品では、子どもの将来を考えた結果、自分の子どもと主人の子どもを取り換えることにいたる奴隷の黒人女性の苦悩と、それがもたらす悲劇を描くことによってトウェインは奴隷制を批判している。しかし、白人として育てられた、黒人の血が流れている子どもが、怠惰で臆病者であり、酒におぼれ、やがて盗みを働くようになり、最後には殺人を犯すというあらすじには、トウェインの

隠れた差別意識が表れているといえる。トウェインは、奴隷制を扱った 2 つの作品で、奴隷制の残酷さを描いてはいるものの、そこには彼の中の「白人優越主義（white supremacy)」の考えが隠れているのである。

「白人優越主義」の考えはアメリカが国家として成立した時代から存在しており、アメリカ建国の父の 1 人であるトマス・ジェファソンの『ヴァージニア覚書（*Notes on the State of Virginia*)』(1785)にも描かれている。『ヴァージニア覚書』の中で、ジェファソンは、「記憶、思考力、想像力の能力で彼らを比べてみると、記憶については白人と同じだが、思考力については非常に劣っており、…想像力については、鈍く、趣味がなく、異常であると思われる」と述べている（146)。黒人が、白人に比べ能力的に劣っているという考えは、アメリカ建国当初からの根強いものであると考えられる。

そのような黒人に対する考えは、奴隷制に反対の立場をとっていた人々の間でも共有されたものだった。たとえば、ハリエット・ビーチャー・ストウ（Harriet Beecher Stowe, 1811-1896)の『アンクル・トムの小屋（*Uncle Tom's Cabin*)』(1852)でも、黒人は白人よりも能力的に劣っている人物として描かれているといえるだろう。『アンクル・トムの小屋』は奴隷制廃止運動の機関紙である『ナショナル・エラ（*National Era*)』に連載、1852 年に出版され、販売初日で 3 千部、以後 1 年間で 30 万部の売上を記録し、アメリカ大衆の反奴隷制感情を燃え立たせた作品である（巽 98)。したがって、『アンクル・トムの小屋』が反奴隷制の作品であることは間違いないのだが、作品の中で、黒人は次のように描かれている。

> He was very busily intent at this moment on a slate lying before him, on which he was carefully and slowly endeavoring to accomplish a copy of some letters, in which operation he was overlooked by young Mas'r George, a smart, bright boy of thirteen, who appeared fully to realize the dignity of his position as instructor.
>
> "Not that way, Uncle Tom,—not that way," said he, briskly, as Uncle Tom

> laboriously brought up the tail of his *g* the wrong side out; "that makes a *q*, you see."
>
> "La sakes, now, does it?" said Uncle Tom, looking with a respectful, admiring air, as his young teacher flourishingly scrawled *q*'s and *g*'s innumerable for his edification; and then, taking the pencil in his big, heavy fingers, he patiently re-commenced. (19)

この場面で、作品の主人公であるアンクル・トム（Uncle Tom)は、アルファベットの綴りの練習をしているのだが、「賢く」、「聡明な」13 歳の白人の少年にアルファベットの綴りを教えてもらっている黒人奴隷の姿は、黒人に対する当時のステレオタイプな描かれ方といっていいだろう。アンクル・トムは、"g"の綴りがうまくできず、"q"のように書いてしまい、「主人」である少年に手ほどきを受けており、白人である少年が書いた手本を「尊敬と賞賛の態度」で眺め、「大きく、不器用な」指で鉛筆を握り、練習を続ける。このような白人の少年より劣り、従順である、ステレオタイプの黒人像からは、奴隷制に反対しながらも、黒人が白人より劣っているという「白人優越主義」的な意識が読み取れる。『アンクル・トムの小屋』は、反奴隷制小説であるが、そこに描かれる黒人の描かれ方は、アンクル・トム自身が読み、納得するものではないのである（Morrison 16-17)。

このような黒人のステレオタイプはトウェインが『ハック・フィン』を執筆した時代にも残っていた。南北戦争による奴隷制の解体の後も、人種差別主義や、白人優越主義、特にアングロ・サクソン優越主義の考えは根強く残ったのである（Stampp 8)。

南北戦争後にも残った黒人に対する差別的なステレオタイプをさらに推し進めたのがミンストレル・ショウ（minstrel show）である。1840 年代に始まり、20 世紀まで続いたミンストレル・ショウは黒人に対するステレオタイプのイメージを普及させた（Roberts 136)。焼いたコルクで顔を黒く塗った白人俳優は、おどけた、無知な人物として、黒人を演じたのである(Roberts 136)。

黒人差別的であるミンストレル・ショウに対する批判は、それが生まれた 19 世紀からすでに存在していた（大和田 16)。奴隷制廃止運動家であるフレデリック・ダグラス（Frederick Douglass, 1818-95)は、ミンストレル・ショウの芸人について、「白人社会の醜悪なクズであり、生まれつき彼らが拒まれた肌の色を我々から奪い、白人仲間の堕落した趣味に迎合している」として、強い嫌悪を抱いている（1)。

しかし、トウェインがミンストレル・ショウに対して感じたのはフレデリック・ダグラスが感じたものとは全く異なったものだった。『マーク・トウェイン自伝』には、トウェインのミンストレル・ショウに対する気持ちが次のように書かれている。

> The minstrel snow was born in the early forties and it had a prosperous career for about thirty-five years; then it degenerated into a variety show and was nearly all variety show with a negro act or two thrown in incidentally. The real negro show has been stone dead for thirty years. To my mind it was a thoroughly delightful thing and a most competent laughter-compeller and I am sorry it is gone. (61)

トウェインは、少年時代に観たミンストレル・ショウが「バラエティ・ショウ」となってしまったことを悲しんでいる。さらに、ミンストレル・ショウを「徹底的に愉快なもの」や「最も満足のできる、笑わせるもの」としてとても高く評価しており、これはフレデリック・ダグラスのミンストレル・ショウに対する意見とは正反対のものといえる。トウェインは『ハック・フィン』のような奴隷制や黒人差別に対し反対の姿勢をとった小説を書きながらも、奴隷制廃止運動家が非難するようなミンストレル・ショウについて肯定的なのである。

ミンストレル・ショウに対するトウェインのこのような考えは『ハック・フィン』の中の黒人の描かれ方にも表れている。トウェインが作品の中で黒人であるジムを好意的に描いていることは間違いないだろう。しかし、

ジムの威厳や人間としての能力はミンストレル・ショウのステレオタイプの仮面に隠れてしまっているのである（Ellison 104)。『ハック・フィン』の中で描かれる黒人像は、ミンストレル・ショウによって広められた差別的なステレオタイプの黒人像といえる。

また、奴隷制に対して批判的である『ハック・フィン』だが、そこにはトウェインの奴隷制に対する曖昧な姿勢も表れている。ハックとジムは奴隷制のない自由州に行くため、ミシシッピ川とオハイオ川の交流地であるケイロ(Cairo)という土地を目指すが、その途中、とつぜん発生した霧によって、ケイロを通り過ぎてしまう。これについて、黒人女性作家としてアメリカ文学の読み直しを試みたトニ・モリソン（Toni Morrison, 1931-)は、「ハックもマーク・トウェインも、想像の中でさえ、自由になったジムを容認できない」と指摘している（56)。結局、小説の最後で、ジムの主人であるミス・ワトソンの遺言状によってジムは解放されるのだが、それは、ジムが黒人に対し差別の強い南部にとどまることを意味している。『ハック・フィン』の物語自体が、トウェインの奴隷制に対する曖昧な意識を表しているともいえる。

トウェインが『ハック・フィン』の中で、やや好意的な黒人像を描いているのに比べ、他の作品で描かれるインディアンの描かれ方は一貫して差別的である。インディアンは、黒人と同じく、トウェインが生きた時代に差別される存在であった。トウェインは、『トム・ソーヤー』や未完の作品である「インディアンの中のハック・フィンとトム・ソーヤー（“Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians”)」などの小説、旅行記である『苦難をしのんで』の中でインディアンを描いている。しかし、『トム・ソーヤー』では、インジャン・ジョー（Injun Joe)という名の、インディアンの血が流れる男は冷酷な人殺しとして描かれ、「インディアンの中のハック・フィンとトム・ソーヤー」では、インディアンを「ひどく下劣なやつら（a powful ornery lot)」(34)と話すジムに対し、ジェイムス・フェニモア・クーパー(James Fenimore Cooper, 1789-1851)の小説を読み、「最も気高い人間（the noblest human beings)」(35)だと思っていたトムが、白人の家族を殺し、子

どもたちをさらうインディアンの姿を目撃し、「本に書かれたインディアンと現実のインディアンは違うんだ（[Book] Injuns and real Injuns is different.)」(79)という結論に達する様子が描かれている。これには、『苦難をしのんで』に書かれているような、クーパーの小説と西部で実際に出会ったインディアンが違うことを知ったトウェイン自身の失望が表れているといえるだろう。トウェインは、「フェニモア・クーパーの文学的な違反（“Fenimore Cooper’s Literary Offences”)」(1895)の中でも、現実とはかけ離れたインディアンを描くクーパーを批判している（383)。トウェインは、インディアンに対しては差別的な意識を隠そうとしないのである。

したがって、トウェインの人種観は複雑なものといえる。インディアンに対する彼の考えは小説や旅行記に表れているように差別的なものであるといってよいだろう。そのようなインディアンの描かれ方と比べると、『ハック・フィン』の黒人の描かれ方は、やや好意的なものとなっている。しかし、『ハック・フィン』の黒人の表象には、トウェインの隠れた黒人に対する差別意識が表れているのである。

さらにいえば、トウェインが黒人と白人との違いを血統によるものであるとしていると考えられるだろう。『まぬけのウィルソン』には、白人として育てられた、黒人の血が 32 分の 1 流れている息子の臆病な性格に対し、彼の母親が「おまえの中の 31 は白人で、1 つの部分だけが黒んぼだけど、哀れで小さな 1 つの部分がおまえの魂だ」(75)という場面がある。この作品では、黒人と白人との違いが、血統によるものであるということが明確に表れている。『ハック・フィン』には、『まぬけのウィルソン』のようなはっきりとした言葉はないが、『ハック・フィン』に表れている、一定の白人が描くステレオタイプの黒人像には、トウェインの人種による違いを血統によるものだとする、「白人優越主義」の意識が表れているといえるといえるだろう。

『ハック・フィン』の黒人の表象に表れている「白人優越主義」の考えは、作品が執筆された当時の欧米の国々による帝国主義に対するトウェインの意識の影響もあるだろう。エイミー・カプランは「マーク・トウェインの

帝国航路」の中で、トウェインが 1866 年にハワイへ行き、帝国主義の現実に直面したことが、講演者及び作家としての彼の職業経歴の形成に影響を及ぼし、また、及ぼし続けたと指摘している（52)。南北戦争直後のハワイへの旅が、彼をノスタルジアと奴隷制の悪夢へと導いた結果、奴隷制についての記憶は先延ばしになり、南北戦争が終結して 20 年が経つまでトウェインは奴隷制について作品で触れなかったというのである（A. Kaplan 75)。

実際、旅先で目撃した帝国主義の現実は、トウェインに、すでに消滅したアメリカの奴隷制を思い起こさせることとなった。1866 年のハワイ行きについて書かれている『苦難をしのんで（*Roughing It*)』（1872)では、トウェインは、ハワイの原住民について、「多くの人々は黒人のように色が濃かった（[The] majority of the people were almost as dark as negroes[.])」（453)と描写したり、彼らが船の甲板に密集して寝転んでいる様子を「奴隷小屋の黒人のように（as negroes in a slave-pen)」（495)と形容している。「旅を通して、トウェインはハワイ原住民の印象と家にいた黒人奴隷の記憶とを絶えず比較していた」のである（A. Kaplan 77-78)。さらに、『赤道に沿って(*Following the Equator*)』(1897)では、インドのボンベイ（現ムンバイ）を訪れたトウェインが、雇い主のドイツ人に殴られたインド人の様子を見て、アメリカの奴隷制を思い起こす場面がある。『赤道に沿って』では、その暴行の様子を見たトウェインは、客である自分たちの前でのドイツ人の振る舞いを「恥（a shame)」（351)だとし、「50 年間このような場面は見なかった」（351)と述べた後、「それは私に少年時代を思い出させ、奴隷に自分の要求を説明するありふれた方法だったという忘れていた事実を思い起こさせた」（351)と語っている。この記述では、トウェインは大英帝国植民地とアメリカ南部を重ね合わせている（杉山 230)。

晩年のトウェインは、帝国主義に関して批判的であった。晩年のトウェインがアメリカによるフィリピンの帝国主義政策に反対したのはよく知られている（杉山 232)。彼の書いた「19 世紀から 20 世紀への挨拶（“A Salutation Speech from the Nineteenth Century to the Twentieth”」(1900)や「暗闇に座る者へ（“To the Person Sitting in Darkness”)」(1901)といった出版物

は反帝国主義運動において最も広く普及し、『スプリングフィールド・リパブリカン（*Springfield Republican*）』によって、「最も影響力のある反帝国主義者」と報道された（Zwick 241）。さらに、1901 年には、トウェインはニューヨーク反帝国主義連盟（the Anti-Imperialist League）の副会長を務めている（Zwick 241）。

晩年は反帝国主義になったトウェインだが、それ以前は帝国主義に関しては異なった考えを抱いていた。それは、彼の新聞記者時代の通信文や旅行記に表れている。

1866 年のハワイ行きの時のトウェインの帝国主義に関する考えについては、サクラメントの「ユニオン（Union）」という新聞に連載された、サンドイッチ諸島に派遣されたトウェインの通信文から読み解くことができる。「ユニオン」でのトウェインの連載をまとめた『マーク・トウェインのハワイからの手紙（*Mark Twain's Letters from Hawaii*）』（1975）の中の「ホノルル、1866 年 3 月（Honolulu, March, 1866）」と題された記事には、アメリカの帝国主義に関する次のような文章が書かれている。

> As we came in sight we fired a gun, and a good part of Honolulu turned out to welcome the steamer. It was Sunday morning, and about church time, and we steamed through the narrow channel to the music of six different church bells, which were peopled by naked, savage, thundering barbarians only fifty years ago! Six Christian churches within five miles of the ruins of a pagan temple, where human sacrifices were daily offered up to hideous idols in the last century! We were within pistol shot of one of a group of islands whose ferocious inhabitants closed in upon the doomed and helpless Captain Cook and murdered him, eighty-seven years ago; and lo! their descendants were at church! Behold what the missionaries have wrought! (26)

トウェインはハワイの原住民のことを「裸の、残忍な、途方もない野蛮人」と呼び、彼らが前世紀まで「おぞましい偶像」に人間を生贄として差し出し

ていたことを、驚きとともに非難している。さらに、「獰猛な住民」の子孫が教会に礼拝に来ていることに触れ、「宣教師たちの行ったことを見よ！」と述べているが、これは宣教師による原住民のキリスト教化について肯定的な考えが表れているといえるだろう。1866 年のハワイ行きの時点では、反帝国主義的であった晩年と違い、トウェインはアメリカによる帝国主義に関して否定的ではないといえるだろう。

さらに、トウェインの最後の旅行記である『赤道に沿って』に表れている帝国主義に対する彼の考えも、晩年の反帝国主義的なエッセイとはやや異なったものである。トウェインは、1895 年 7 月から借金返済のため、ハワイ、フィジー、オーストラリア、ニュージーランド、セイロン、インド、南アフリカを訪れる、赤道に沿って地球を一周する講演旅行に出かけた(飯塚 161)。『赤道に沿って』はその旅行記である。トウェインは、『赤道に沿って』の中で、「世界には多くのユーモラスなことがあるが、自分たちが他の野蛮人よりも野蛮ではないと思っている白人の考えもその 1 つである（There are many humorous things in the world; among them the white man's notion that he is less savage than the other savages.)」(213)と述べ、帝国主義の残酷さを語りながらも、次のように書いている。

> The signs of the times show plainly enough what is going to happen. All the savage lands in the world are going to be brought under subjection to the Christian governments of the Europe. I am not sorry, but glad. This coming fate might have been a calamity to those savage peoples two hundred years ago; but now it will in some cases be a benefaction. The sooner the seizure is consummated, the better for the savages. The dreamy and dragging ages of bloodshed and disorder and oppression will give place to peace and order and the reign of law. When one considers what India was under her Hindoo and Mohammendan rulers, and what she is now; when he remembers the miseries of her millions then and the protections and humanities which they enjoy now, he must concede that the most fortunate thing that has ever befallen that empire

was the establishment of British supremacy there. The savage lands of the world are to pass to alien rulers. Let us hope and believe that they will all benefit by the change. (625-26)

トウェインは、「未開の土地」がヨーロッパのキリスト教の政府の支配下になることについて、「残念ではなくうれしい」と語り、それを「来るべき運命」と呼び、「善行」であるといっている。さらに、ヨーロッパの帝国主義が、「流血の惨事」や「無秩序」、「圧政」を「平和」や「秩序」、「法による統治」に変えるといい、「イギリス覇権の確立」がインドにとって「最も幸運なこと」であるとしている。『赤道に沿って』の帝国主義に関する描写からは、白人入植者による帝国主義が残酷なものであるとしながらも、その優位性を疑うことのないトウェインの心の内が読み取れる。

トウェインの帝国主義に関する記述に表れた「白人優越主義」の思想は、『ハック・フィン』と無関係ではないだろう。トウェインは、欧米諸国による帝国主義と奴隷制という自分自身の記憶を結びつけて考えている。『ハック・フィン』の黒人表象には、奴隷制の残酷さを描きながらも、「白人優越主義」の考えを持っていたトウェインの人種観が表れているといえる。

結

トウェインは、『ハック・フィン』によって、自らの南部人としての意識を捨てようとした。そして、奴隷制を当然のものとしている南部社会を、「物語の語り方」で説明している「ユーモラスな物語」を語る手法を用いることで、ハックの無垢な視点から南部社会を語り、読者に南部社会の人々の残酷さを批判させている。

また、作品の中でのトムの描かれ方からは、幼少期を南北戦争以前の南部社会で過ごし、旧南部社会の習慣を疑うことのなかったトウェイン自身への批判も考えられる。『マーク・トウェイン自伝』で述べられているように、トウェイン自身も幼いころは奴隷制について疑うことはなかった (6)。

さらにいえば、トウェインは南北戦争が起こった時、戦うことなく 2 週間で解散してしまったものの、南軍の義勇軍を組織している（Robinson 37)。少年時代のトウェインは、ハックよりもトムに近い子どもだったといえるだろう。トムはトウェインのノスタルジーの産物であり、理想の化身でもあったのである（亀井 347)。

実際のところ、トウェインは南部的な作家というよりも、西部的な作家としてみなされている。ウィリアム・ディーン・ハウエルズは、トウェインが西部的な作家であることを述べ、彼のことを「私の知る中で最も脱南部化した南部人」と呼んでいる（277)。5 年半にわたる西部での暮らしは、トウェインの南部色をゆっくりとだが変化させることとなった（Petit 32-33)。平石貴樹は、トウェインが幼少期を過ごしたミズーリ州は奴隷州の中では最北に位置していたため、南部の大義に対しては一枚岩的ではなく曖昧であったため、トウェインは「南部色」を「脱色」することを可能だと考えたと指摘している（16-17)。

『ハック・フィン』において、トウェインは旧南部社会の奴隷制や南北戦争後にも根強く残った黒人に対する人種差別に対し批判の姿勢をとっている。それは、『ハック・フィン』の中での奴隷制の残酷さや黒人奴隷であるジムに対するハックの内面の変化の描写からみて間違いないだろう。

しかし、『ハック・フィン』における黒人の描かれ方は当時のある種の白人が抱いていたステレオタイプの黒人像である。トウェインの描く黒人像は、子どもっぽい、無知、臆病、滑稽、従順といったステレオタイプなものであり、これにはトウェインの「白人優越主義」的な考えが表れているといえる。また、このような「白人優越主義」的な黒人の描かれ方は、アメリカ建国の父の 1 人であるトマス・ジェファソンの『ヴァージニア覚書』や北部の作家であるハリエット・ビーチャー・ストウの反奴隷制小説である『アンクル・トムの小屋』にも見られ、アメリカの白人中産階級層には広く浸透していた黒人に対する意識ということもできる。

『ハック・フィン』に表れている「白人優越主義」については、トウェインの帝国主義に対する考えも関係している。『マーク・トウェインのハワ

イからの手紙』や『赤道に沿って』には、帝国主義に対して肯定的なトウェインの考えが表れており、それは、トウェインが「白人優越主義」の考えを持っていたことを意味している。そのようなトウェインの意識は、『ハック・フィン』にも現れているのである。

さらに、『ハック・フィン』における黒人の描かれ方には 1840 年代に始まったミンストレル・ショウの影響もあると考えられる。フレデリック・ダグラスのような奴隷解放論者によって強く非難されたミンストレル・ショウだが、トウェインはそれを高く評価している。『ハック・フィン』の黒人描写にミンストレル・ショウが与えた影響も大きいだろう。

以上のような『ハック・フィン』における黒人描写はトウェインの他の作品に登場するインディアンとは大きく異なったものである。トウェインが描くインディアンは殺人者や「ひどく下劣な」存在として描かれ、これにはトウェインの差別意識が強く表れている。それに比べると、トウェインの黒人に対する意識は複雑なものといえる。『ハック・フィン』における黒人の表象からは、奴隷制を当然のものとしていた幼少期と南北戦争による奴隷制の否定というその両方の時代を生きたトウェインの南部人としての差別意識が表れているといえるだろう。

『ハック・フィン』における黒人の表象に表れている、以上のようなトウェインの南部人としての差別意識は、トウェイン個人の問題というだけでなく、作品を読んだ読者にもつながる問題でもある。『ハック・フィン』は、出版されて 2 カ月で 5 万 1 千部売れるベストセラーであった（J. Kaplan 269)。多くの人々によって読まれることは、『ハック・フィン』に隠された差別意識の再生産へと繋がったと考えられる。

しかし、トウェインが『ハック・フィン』の中で、黒人を好意的に描こうとしているのは明らかである。トウェインは、ジムを物語の重要な役にするだけでなく、ハックとジムの人種を超えた友情を描いている。『ハック・フィン』が出版された 1885 年には、南北戦争後も残った黒人に対する差別意識が強く残っていた。黒人に対し好意的である『ハック・フィン』にさえ、差別意識が表れているという事実からは、その時代の黒人に対す

る差別意識の強さを考えることにもつながるであろう。

注

[1]本稿では、「黒人」や「インディアン」、「プア・ホワイト」、「ホワイト・トラッシュ」、「浮浪児」、といった差別用語を、当時の差別的な状況に対する意識を示すために使用しているが、初出時に括弧にいれることで、差別用語であることを示す。また、「ミス(Miss)」や「ミセス (Mrs.)」「未亡人 (the Widow)」といった表現も、女性を婚姻関係で表わす差別的な表現とみなし、同様に初出時に括弧にいれることで、その考えを示す。

[2]Mark Twain のテキスト *Adventures of Huckleberry Finn* は Norton 版を使用する。本書は *AHF* と略記し、以下頁数によって示す。

引用文献

Blair, Walter. *Mark Twain and Huck Finn*. Berkeley: U of California P, 1960. Print.

Blair, Walter, and Victor Fischer, ed. *Adventures of Huckleberry Finn: An Authoritative Text Contexts and Sources Criticism*. 3rd ed. New York: Norton, 1999. Print.

Bloom, Harold, ed. *Modern Critical Interpretations Mark Twain's Adventures of Huckleberry Finn*. New York: Chelsea, 1986. Print.

Cox, James M. "A Hard Book to Take." Bloom 87-108.

Douglass, Frederick. "The Hutchinson Family Hunkerism." *North Star* 27 Oct. 1848. *Uncle Tom's Cabin and American Culture*. Web. 26 Nov. 2014.

Ellison, Ralph. "Change the Joke and Slip the Yoke." 1958. *The Collected Essays of Ralph Ellison*. New York: Modern Library, 1995. 100-12. Print.

Fishkin, Shelley Fisher, ed. *A Historical Guide to Mark Twain*. Oxford: Oxford U P, 2002. Print.

Henry, Peaches. “The Struggle for Tolerance.” Leonard, Tenney, and Davis 25-48.

Hoffman, Michael J. “Huck’s Ironic Circle.” Bloom 31-44.

Howells, William Dean. *Literary Friends and Acquaintance*. Ed. David F. Hiatt and Edwin H. Cady. Bloomington: Indiana U P, 1968. Print.

Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia*. 1785. New York: Penguin, 1999. Print.

---. “The Autobiography of Thomas Jefferson.” 1821. *Jefferson: Writings*. Ed. Merrill D. Peterson. New York: Library of America, 1984. 1-101. Print.

Kaplan, Amy. “The Imperial Routes of Mark Twain.” *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture.* Cambridge: Harvard U P, 2002. 51-91. Print.

Kaplan, Justin. *Mr. Clemens and Mark Twain*. New York: Simon and Schuster, 1966. Print.

Leonard, James S., Thomas A. Tenney, and Thadious M. Davis, ed. *Satire or Evasion?: Black Perspectives on Huckleberry Finn*. Durham: Duke U P, 1992. Print.

Marx, Leo. “Mr.Eliot, Mr.Trilling, and *Huckleberry Finn*.” Bloom 7-20.

Morris, Richards B. “‘We the People of the United States’: The Bicentennial of a People’s Revolution.” *The American Historical Review* 82.1 (1976):1-19. Print.

Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. 1992. New York: Vintage-Random, 1993. Print.

Pettit, Arthur G. *Mark Twain and the South*. Lexington: U P of Kentucky, 1974. Print.

Quirk, Tom, ed. *Tales, Speeches, Essays, and Sketches*. London: Penguin, 1994. Print.

Roberts, Kevin D. *African American Issues*. Westport, CT: Greenwood, 2006. Print.

Robinson, Forrest. “Mark Twain, 1835-1910: A Brief Biography.” Fishkin

13-51.

Smith, David L. “Huck, Jim, and Racial Discourse.” Leonard, Tenney, and Davis 103-20.

Stampp, Kenneth M. *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*. 1956. NewYork: Vintage-Random House, 1989. Print.

Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin: Authoritative Text Backgrounds and Contexts Criticism.* 2nd ed. 1852. Ed. Elizabeth Ammons. New York: Norton, 2010. Print.

Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*: *An Authoritative Text Contexts and Sources Criticism*. 3rd ed. 1885. Ed. Walter Blair and Victor Fischer. New York: Norton, 1998. Print.

---. *The Adventures of Tom Sawyer: Authoritative Text Backgrounds and Contexts Criticism.* 1876. Ed. Beverly Lyon Clark. New York: Norton, 2007. Print.

---. *The Autobiography of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. London: Chatto, 1960. Print.

---. “Fenimore Cooper's Literary Offences.” 1895. Quirk 391-96.

---. *Following the Equator: A Journey Around the World*, 1897. New York: Dover, 1989. Print.

---. “How to Tell a Story.” 1895. Quirk 377-90.

---. *Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians and Other Unfinished Stories*. Ed. Dahlia Armon and Walter Blair. Berkeley: U of California P, 1989. Print.

---. *Mark Twain's Letters from Hawaii*. Ed. Grove Day. Honolulu: U of Hawaii, 1975. Print.

---. *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins: Authoritative Texts Textual Introduction Tables of Variants Criticism.* 2nd ed. 1894. Ed. Sidney E. Berger. New York: Norton, 2005. Print.

---. *Roughing It*. 1872. Ed. Hamlin Hill. London: Penguin, 1981. Print.

Woodard, Frederick and Donnarae MacCann. “Minstrel Shackles and Nineteenth- Century ‘Liberality’.” Leonard, Tenney, and Davis 141-53.

Yamaguchi, Yoshiko. “The Stranger Motif in *Adventures of Huckleberry Finn*.” Journal of Yamanashi Eiwa College 21 (1988): 70-91. Web. 22 Oct. 2014.

Zinn, Howard. *A People’s History of the United States*. 1980. New York: Harper Perennial Modern Classics, 2005. Print.

Zwick, Jim. “Mark Twain and Imperialism.” Fishkin 227-55.

平石貴樹 「トウェインの西部／南部」 『アメリカ文学の冒険―空間の想像力』 原川恭一編著 彩流社 1998 年 15-32 頁

井出義光 『南部―もう一つのアメリカ』 東京大学出版会 1978 年

飯塚英一『旅行記作家マーク・トウェイン―夢と晩年のファンタジー』彩流社 2006 年

亀井俊介 『マーク・トウェインの世界』 南雲堂 1995 年

大和田俊之 『アメリカ音楽史―ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』講談社 2011 年

杉山直人 『トウェインとケイブルのアメリカ南部―近代化と解放民のゆくえ』 彩流社 2007 年

巽孝之 『アメリカ文学史―駆動する物語の時空間』 慶應義塾大学出版会 2003 年